

音楽と私

シニアアンサンブル取手、シニアアンサンブル牛久 ドラムス佐川友英

私の今のドラム付き合いは、小学6年生の鼓笛隊小太鼓から始まった。1964年東京オリンピック開催の年で校内で鼓笛隊が発足され初期の小太鼓メンバーになった。指揮、大太鼓、中太鼓、小太鼓、鉄琴、リコーダーの構成、ユニフォームは体操着だったと思う。中太鼓も担当し、指揮に合わせて小太鼓（4～5人）のロールのテンポ、イントロの「タララ～ン タンタン.タララ～ン タンタン.タンタンタンタカタンタンタン タンタン タカタカ タンタンタン・・・」が合わず、放課後残され、女性音楽教師の黒板に譜面が書かれた練習が毎日あった。黒板譜面を見ながらメロディーも無し先生の手拍子よりの練習を今でも記憶にある。

町内の祭りで小太鼓を叩いていたので祭り太鼓は耳で体で身につけてきた。リズムが覚えやすく隣の太鼓に合わせるのには楽に考えていたと思う。記憶にある曲名は、ソ・ソ・ソ・ラ・ソ・ミ・レ・ドの「希望の虹」や「若い力」で町中をパレードしてた。中三の頃長兄が大学でコーラス部を立ち上げその仲間達と交流し（現在も）音楽が更に身近になりギターを始める。高二でギターバンドを組むが物足り無く、その後兄は社会人ジャズバンド活動していて影響を受けコントラバスを譲り受けて、たまたま近所の人（現在プロジャズピアニスト）に教えて貰い文化祭等で演奏してた。更に友人のドラムを叩き始めジーン・クルーパーを尊敬した。

就職は都内の百貨店、早速楽器売り場のジャズが好きな店員とバンドを編成、ベースとドラムを担当、たまたまプロのバンマスと知り合いベースの空きがあるからと誘われてプロと一緒に演奏することになった。女性ボーカル2名、キーボード、ドラム、ギターがバンマスのバンドで、練習なしリハなし譜面なしバンマスがギ

ター弾きながらコードをそっと言ってくれるやり方でその日から本番。ジャズスタンダードから客のリクエストをこなすプロバンドに20才の自分がいたが、全然立派ではない。知らない曲の言われたコードを分解して弾いているだけで1年程続く仕事の都合で英・仏国で働くことになりやめることに。今思うと継続・努力してたら別な人生があったかも・・・と懐かしむ。成長するに従って仕事、家庭の方が優先になり音楽は聴く方のみになる。新宿の厚生年金会館・銀座ガスホールでのライブ、ジャズ喫茶ピットインの会員にもなり内外のジャズアーチストを近場で聴いて楽しかった。



あれから36年、50半ば、ギター・ベースは弾けなくなっていた、好きなドラムは教室に行ったり継続していたクラシックジャズが好きになり友人と楽しむ。その年2006年に仕事で右手首骨折・指複雑骨折腱断裂の大怪我する。リハビリするもドラムは叩けなくなっていた。チタンのプレートとボルトが16本埋め込まれたままで、8年後の平成26年7月取手SEに友人から誘いがあった。昔の様に合わせられるだろうか、すぐ入団してやはり合わないのが自分で気が付いていた。それを最終的に解消してくれたのは指揮者、菅先生だった。指導法が巧みな話術で自信を持たしてくれる。私の場合はと言うと入団当時菅先生に「リズム感が無い」と言われ悔しくて数ヶ月欠席。過去は出来ていたけど今はできていないんだと気づき、感覚を取り戻す為にドラム教室をマンツーマンの週1回通い、基礎からやり直したのが64才。数ヶ月後楽団に行き菅先生が変化に気づき、何度も褒めてくれた驚き顔を今でも思い出す。褒められるからそれに答えねばと練習を重ねて期待に応える、難曲は体が拒否反応するが、練習に練習重ねているうちに少しずつ出来ているのに気付く。後に1楽団で物足りず牛久SEにも入団する、県内に新規楽団が次々発足しドラマーがいなく、岡村顧問から応援を依頼されれば、石岡SE・水戸SE・下妻SE・と定演向けの応援を喜んで受けた、定演や慰問も多く、聴いてくれる人がいると一生懸命楽しませたい。コンボとは違う楽団での演奏は格別に伝わる。また奏でる方も緊張と感動が何とも言えない。アンサンブルでのドラムの役割を指揮者通じて向上したいと思っている。現在は取手と牛久の団員で石岡SE・つくばSEの応援メンバーで4団体を楽しんでいます。